なごりおしくおもえども

―愛別離苦（あいべつりく）を縁（えん）に―

相馬　豊

東本願寺出版

はじめに

私たちは、どういう縁でこの命を終えていくのか、わかりません。しかし生まれてきたならば、必ずその命を終えていかなければならない。言葉を変えて言いますと、私たちがここにいるということは、死すべき身としてここにいるということなのです。その死すべき身を持ちながら、今をこうやって生き続けています。

この「生死」ということについて、親鸞聖人が語られた言葉がこのように伝えられています。

われもひとも、生死をはなれんこととこそ、諸仏の御本意にておわしませば、

（『歎異抄』第十二章・聖典第二版七七四頁）

私だけということではなくて、私も他人も生死からはなれさせたい、それがあらゆる仏さま方の願いであるのだと。つまり、私たちの人生における根本の問題は、私たちが生死に苦しみ、悲しむ存在であるということです。言わばこのことは、全人類が抱えている大きな問題でしょう。

しかし、生死ということが本当の問題でありながらも、私たちはこの問題から無意識的に目をそらして生きているようです。人間の性でしょうが、経済的に裕福に、また健康で長生きであることを求め、そして社会的に高い地位を目指して邁進する内に、大事な問題がすり替えられています。いずれも生きていく上で大事なことであるとは思いますが、いくらその道に邁進したとしても、私たちは「生死」からは決して離れられないのです。

具体的には、「愛別離苦」――私も含めて、多くの方々が、このことを体験されてきたのではないでしょうか。愛しい人と、大切な人と別れないといけなかったということです。つまり、「生死」の苦しみです。

私の「生死」の原点は小学二年生の時です。祖父が病気を患って、そして日に日に

死に近くなっていく。叔母は祖父の看病に三日間泊り込みました。常に祖父の横にいて、寝ている祖父の膝から足首をずっとさすっていました。そして、十一月十六日、午後三時すぎに祖父がその生涯を終えていきました。その折に往診に来ていたお医者さんが祖父の臨終を伝えた時、叔母はその「臨終です」という一言を聞いて泣き出しました。と同時に、泣きながら膝から足首をさすりつつ、こう呼びかけていました。「戻ってこい、戻ってこい――」と。

自分の父親の死ということに出あって、あふれ出す愛しさ、別れることの辛さ、それが私たちの愛別離苦です。祖父の死、そして叔母の言葉。それが、人間は亡くなって行くのだという生死の問題、その原点として私に刻み込まれました。この悲しみを今日まで抱きながら、生き続けていると言ってもいいと思います。大切な人、愛しい人と別れていかなければならないということは、人間の悲しみです。それが、仏教では「愛別離苦」という言葉で教えられています。

私という問題

お預かりしているお寺のご門徒に、がん治療を受けている方がいます。今も抗がん剤治療を続けられているその方の姿に、教えられることがありました。

その方は毎月二日、お寺に足を運び、またお母さんの御命日には、ご家族と後ろに座られて、「赤本」（『真宗大谷派勤行集』）を開いて、一緒に「正信偈」のお勤めをしていました。六月の月命日のお参りに伺った時に、「正信偈」の中ほどまで読むと、「住職、もう一緒に声出すことできんわ。椅子に座っていることさえ辛くなったので、部屋に戻ります」と、お勤めの最中に声をかけられて、連れ合いの方と長女に両脇をかかえてもらって、自室に戻られました。その自室からは、私の「正信偈」の声に合わせて、たどたどしくも、「正信偈」の声が聞こえてきました。

そして、お勤めが終わって、その家を出ようとした折に、連れ合いの方が声をかけ